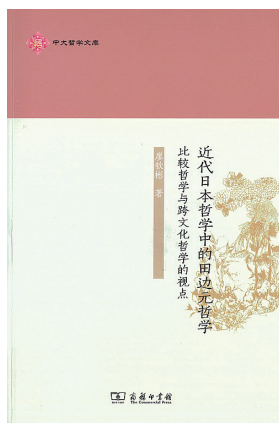


廖欽彬

『近代日本哲学における田辺元哲学  
——比較哲学と跨文化哲学の視点』

廖欽彬『近代日本哲学中的田辺元哲学…比較哲学与跨文化哲学的视点』

張 政遠



北京：商務印書館、2019年

中国語圏において、廖欽彬氏（以下、「著者」と略す）は田辺元哲学研究の第一人者であると言っても過言ではない。著者は博士論文「宗教哲学の救済論——後期田辺哲学の研究」（筑波大学、二〇〇九年）に基づいて、二〇一八年に『宗教哲学の救済論——後期田辺哲学の研究』（国立台湾大学出版中心）を上梓した。著者の持論を要約すれば、中期哲学の「種の論理」が破綻し、後期哲学の「懺悔道の哲学」や「死の哲学」などを展開してきた田辺哲学は、近代日本の宗教哲学の構築に成功したということである。二〇一九年に刊行された『近代日本哲学中的田辺元哲学…比較哲学与跨文化哲学的視点』（以下「本書」と略す）は、著者の研究成果を中国語で発表した画期的な単著であるといえる。

本書の狙いは、中国語圏に田辺哲学を紹介することだけではない

く、比較哲学あるいはトランスカルチャー的哲学のポテンシャルを提起することであり、具体的な内容としては、①宗教哲学、②歴史哲学、③存在論と現象学、④比較哲学とトランスカルチャー的哲学研究となっている。以下、簡単に評したいと思う。

まず、著者は「導論」の中で、田辺哲学の三期説を主張している。つまり、前期は「科学哲学・数理哲学」、中期は「批判哲学・実存哲学・弁証法」、そして後期は「宗教哲学」である。いきなり「宗教哲学」（第一章）から展開するという構成をみれば、後期田辺哲学が本書の「核」とされていると言えよう。しかし、本書は田辺だけではなく、西田幾多郎と清沢満之（第二章）、久松真一（第三章）、大島康正（第五章）、大森荘蔵（第六章）、南原繁（第七章）、カール・バルト（第八章）、マーティン・ハイデガー（第

九章)なども論じられており、田辺哲学に関しても、「種の論理」成立以前の「易経思想解釈」(第十章)、中期とされた「実存哲学」(第十一章)、「道元」(第十二章)などが論じられている。本書は、中国の研究者に実に馴染みやすい内容が含まれているといえよう。ところが、中国では日本の哲学者たちがしばしば批判される対象となっている。例えば、朱謙之(一八九九—一九七二)は西田と田辺についてこう論じている。

西田の哲学は日本の資本主義の独断の発展に従い、反動的になっている。天皇制とは、すなわち天皇とその宮廷、軍事、行政官僚と貴族、寄生的土地所有者と独占資本家の結合に基づいたものであり、西田の哲学はまさに天皇制を弁護する哲学である。「中略」田辺は日本唯心主義哲学の第二の代表者であり、西田と同様にドイツの資産階級哲学の各段階を取り入れることを通して自らの哲学を展開している。<sup>①</sup>

周知のように、西田と田辺が時局的発言をしたのは事実ではあるが、陸軍の全体主義的な思想に全面的に同意したわけではない。日本哲学を理解するためには、レッテルを貼って敵とみなすことではなく、まずテキストを読み解くことが必要不可欠だと考えられる。

著者はさまざまな先入観を括弧にいれ、丁寧に田辺の哲学とその政治的な側面を論じているように思われる。具体的にいえば、著者は第四章「戦時における田辺の歴史観」の中で、田辺の哲学と政治について紹介した。田辺の「種の論理」について軍国主義に直接に影響したことはない(p.154)と著者は書いている。もちろん、田辺が「生死」(一九四三年十月)や「文化の限界」(一九四四年二月)などの講演において時局的発言を行ったことは事実として否定できない。しかし、著者によれば、問題はそう簡単ではない。田辺は一九四四年十月に京都哲学会の講演で「懺悔の立場」を表明した(p.152)。また、いわゆる「大島メモ」の先行研究を紹介した著者によれば、十八回の海軍との会議に六回しか参加しなかった田辺は、「消極的」だったということである(p.86)。また、戦争中に国家を絶対化した田辺は戦後になって「反省」した、と著者は田辺を弁明しようとしている(p.153)。

しかし、田辺は本当に「反省」したのか。著者は、田辺が「転回」することによって懺悔できたと論じているが、これは結局不十分だと言わざるを得ない。例えば、加藤周一はこう書いている。

田辺元(一八八五—一九六二)は「歴史的現実」のなかで、歴史的現実一般について抽象的に語ったときに、もつともらかった。しかし具体的に世界の歴史のなかでの日本の意味

について語るときには、荒唐無稽でしかなかった。〔中略〕

田辺の議論は、戦後にも、戦時中と同じように、日本の社会の具体的な現実に触れるや否や途方もない見当ちがいをおかすという点で少しも変わっていない。そしてそのことはおそらく、戦時中の「大東亜共栄圏」支持から戦後の社会民主主義への移行が、変節であるか、どうかということよりも、重要であると思う。田辺の論理は技術的なものであり、彼はその技術をそれぞれの時代の「国民の大多数」の考えの正当化に用いた。「国民の大多数」以上の現実の解釈もなければ、床屋政談以上の現実のなかでの経験もなかった。<sup>2)</sup>

田辺は「政治哲学の急務」の中で「主権は国民にあると同時に、天皇に帰向する」といい、立憲君主制を擁護しようとしたが、その根拠は「今日の国民の大多数が、天皇制存置国体擁護に於て一致する」という程度のものしかない。加藤によれば、「天皇制存置国体擁護に於て」国民の大多数が一致したのは、明治以来の半世紀以上に及ぶ教育の結果である。その教育のもう一つの結果は、十五年戦争と民主主義的原理の完全な破壊である」という。

近年の西田研究では、「責任」と「責任感」に着目した研究がある。例えば、林永強氏は、前期西田の倫理学から政治哲学への軌跡を考察し、後期西田のいう世界の日本を一つの具体例として、

「責任」と「責任感」との不可分の関係を論じている。さらに、林氏はこう述べている。

前期西田の「自他感情の一致」の立場から、同時に主観的・客観的に「責任」を考えるべきであることを引き出して、「責任感」との重要性をもたらした。そこから「東アジア」から／への情理一体の観点も要約的に紹介した。<sup>3)</sup>

例えば、「皇道精神に基く八紘為宇の世界主義」というプロパガンダを、日本哲学の研究者としてどのように「責任」をもつて解釈すればよいのか。ここでは、「責任」あるいは「責任感」とは何かについての分析は結構だが、「責任」すなわち「応答可能性 (responsibility)」は如何にして可能なのかも重要な課題であろう。加藤の田辺批判にどのように応答するかが問われるだろう。

なお、同じ著者によって台湾で刊行された『宗教哲学の救済論——後期田辺哲学の研究』の中に、「最後に台湾という異文化の観点から、台湾植民地時代の哲学者・洪耀勳の「実存」概念をめぐる哲学的思索を論究しつつ、間文化的視点から田辺哲学との比較を試みた」という内容があるが、残念ながら本書では割愛されている。著者は、田辺における「政治」と「哲学」との関係を積極的に論じており、中国語圏の読者を強く意識していることは大

いに評価できるが、願わくは、日本哲学についても台湾哲学についてをもっと自由に議論したいところである。

注

- (1) 拙論「中国語圏における日本の哲学」『日本哲学の国際性』世界思想社、二〇〇六年、二四五頁より引用。
- (2) 加藤周一『日本人とは何か』講談社学術文庫、一九七六年、一九五頁。
- (3) 林永強「西田幾多郎の政治哲学——東アジアからみた責任と責任感とのあいだ」『哲学』第六十七号、二〇一六年、四〇頁。